

# いま求められる協同 ～刑事裁判から見えるもの

佐木隆三（作家）

## 「八幡製鉄所安全の歌」

いまご紹介いただきましたように、私は昭和31年（1956年）に地元の高等学校を卒業して、18歳の時に当時の八幡製鉄株式会社八幡製鉄所に入りました。先ほど新日鉄八幡のうたう会の合唱がございましたけれども、私はいま65歳でありまして、今日の方々は私より年齢的にすこし若い方々であろうかと思えますけれども、歌を聴いて思い出した八幡製鉄所の歌がありまして、風邪をこじらせて入るのですがそれでもあえて「八幡製鉄所安全の歌」というのを聴いていただきます。2番ございます。

今日も元気でお怪我なく、笑顔のお帰り待ってます。

電車、自動車、スクーター、走る車に気をつけて、

いってらっしゃいお父さん。

鉄の仲間の合言葉、皆さんおはようご安全。  
安全呼称を身につけて、つくるよい鉄安  
い鉄、

今日もあげます、安全値

「作るよい鉄安い鉄」というのがこの安全の歌の一番大事なところでありまして、実

際労働者が安全を守っていれば、よい鉄安い鉄ができないということは私も昭和31年から第2分解工場という圧延工場に付属する事務所で働いていたんですけども、八幡製鉄所には洞海湾に原料ヤードというのがありまして、貨物船で鉄鉱石、石炭、スクラップを運んで、山のように積み上げておりますけれども、このスクラップヤードで時々爆発事故がおきておりました。

私が入社した頃、その数年間、年間10人ほど死者が出ておりました。スクラップヤードでそんなに死者が出るのは大変なことでありまして、後にそのことを調べようと思って、八幡製鉄所の記録を見ましたところ、スクラップヤードでなくなった方のことなど、社史にも全く出ておりませんで、何故かというスクラップヤードで屑鉄の処理にあたっていた人たちはいわゆる下請け・孫請けで働いている人たちで、社員ではありませんので一切統計から消えているわけなんです。

その時、原料ヤードで屑鉄が爆発したというのは、さざなみのように広い製鉄所の構内に広がって行って、その時言っていた



#### ■プロフィール

1937年威鏡北道（現在は朝鮮民主主義人民共和国）生まれ。41年に帰国。56年福岡県立八幡中央高校卒業。八幡製鉄所（現在：新日本製鐵）に入社。勤務の傍ら執筆活動に取り組む。64年に退社。

63年「ジャンケンボン協定」で新日本文学賞、76年「復讐するは我にあり」で直木賞、91年「身分帳」で伊藤整文学賞を受賞した。

犯罪事件の現場に立ち、裁判の推移を凝視し、鋭い人間観察と、かつてない豊かな視点で、社会派小説の世界を構築し、切り拓く。

近著に「死刑囚永山則夫」「宮崎勤裁判（上）（中）（下）」「オウム法廷連続傍聴記」「悪女の涙～福田和子の逃亡15年」「少年犯罪の風景」などがある。ニュース番組のコメンテーターとしても活躍。福岡県高齢者福祉生活協同組合組合員。

のが「また、沖縄が爆発した」という言い方だったんですね。その頃、八幡製鉄所に運ばれてくる屑鉄は、ほとんど沖縄から入っておりました。

#### 「鉄の暴風」

1945年3月にアメリカ軍が上陸して6月21日に組織的な抵抗を日本軍が止めるまで、すさまじい地上戦が展開されていたんですね。この時、沖縄に投入されたアメリカ軍は45万人と記録上出ておりますけれども、後のベトナム戦で南ベトナムに投入されたアメリカ軍が約50万だといわれています。そうすると、沖縄本島は南ベトナムの面積に比べて130分の1でありまして、ここに45万のアメリカ軍が投入された。そして日本軍は合計6万5908人いたのでありますけれども、生存者は約7400人。1割ちょっとしか生存していないんですね。しかし当時、沖縄戦が始まる直前、沖縄本島の人口は49万2128人だったそうでありまして、軍人及び軍属が2万8228人、いわゆる「ひめゆり部隊」などその他戦闘参加者が5万5246人、一般の住民9万4754人、計17万

8228人が沖縄戦で亡くなったのです。

沖縄では沖縄戦のことを「鉄の暴風」といいます。このときに打ち込まれた砲弾、投下された爆弾、兵器の残骸は日米双方で250万トンと推定されています。沖縄戦のあと占領したアメリカ軍は陸と海に散在する戦争スクラップを「戦利品だ」と主張して、勝手な処分を禁じておりました。しかしスクラップというのは、製鉄所にとっては貴重な原料でありまして、早くからスクラップを処理していました（最初のうちは密輸する形で本土にもってきたようではありますが）。1946年から1958年までの13年間、沖縄でスクラップの処理に関する爆発は815件、事故による死者が623人、負傷1130人という琉球政府の統計があります。戦後のスクラップの処理のためにこのようなおびただしい数の死傷者が出ているのです。

#### 朝鮮特需と沖縄戦のスクラップ

1950年（昭和25年）に朝鮮戦争がはじまりまして、ご承知のように日本経済は奇跡の復興をとげました。そのときの特需で最初に活況を呈したのは八幡製鉄所でありま

す。製鉄所ですから大量のスクラップを必要としていたのです。そのスクラップは沖縄戦で出たスクラップだった。人々はあらそって土を掘り返し、スクラップ業者が海に沈んだものを引き上げていきました。たとえば慶良間諸島の沖合で弾薬一万トンを積んだ沈没船がありました。これを引き上げるためにダイバーがダイナマイトをしかけた。それが爆発して死者が30人とも40人ともいわれておりました。

そして1956年、沖縄（当時はアメリカの占領下にあつて琉球政府でしたが）の対本土の輸出は1100万ドル。昔からの沖縄の主要産業は黒砂糖でありましたが、この年は黒砂糖を抜いて、屑鉄がじつに輸出総額の56%を占めていたのです。まさに私が八幡製鉄所に入社したときに、沖縄からのスクラップが大量に送られていたのです。

たとえば戦車なら戦車がそのままそっくり送られてきます。ガスバーナーで焼ききって製鋼にする炉に入れていました。そのときに不発弾が爆発して年間10人くらいの人死んでいった。非常にショッキングなできごとでありました。

話がくどくなりますが、なぜスクラップ

が製鉄所にとって必要かということですが、当時、鋼をつくる炉は「平炉」といっておりました。溶鉱炉は鉄鉱石と石炭を蒸し焼きにしたコークスを、炉の上から入れてコークスの熱で鉄鉱石が鉄に還元されて炉底からほとばしりです。これが銑鉄です。これは、炭素の含有量が多いからそのまま圧延することはできません。銑鉄を平炉に運んで、スクラップをまぜて燃焼させて鋼にする。鋼にしてはじめて圧延工程に運ばれていくわけです。当時、銑鉄5に対して屑鉄5という割合でしたので、大量のスクラップを必要としていたわけです。

### 八幡製鉄所の隠された歴史

八幡製鉄所では戦前から屑鉄は80%まで輸入に頼っていましたが（鉄鉱石は100%でした）。1940年11月、アメリカは日本に対して屑鉄の輸出を禁止しました。日中戦争がどんどん拡大して行って、日本がさらに南方に向けてエスカレートしていきそうな勢いをもっていたからです。1941年7月に日本軍は、フランス領インドシナ、ベトナムに侵攻。日本軍は航空基地を確保し、シンガポール、フィリピン、オランダ領インドシナ

に対して航空戦力が発進可能になって8月にアメリカが対日ガソリンの禁輸をした。そうしていよいよ12月8日の対米宣戦布告になっていきました。パールハーバーに奇襲攻撃を加えたのも、アメリカの太平洋艦隊を叩いておいて日本が、当時のインドシナに戦線を拡大するためです。

屑鉄というのは軍需産業の最たる製鉄所にとってそのくらい必要だったということです。そして戦後になって、あの「鉄の暴風」といわれ



た沖縄から大量のスクラップが送られてきて、年間10人くらいの死者が出ていたのです。八幡製鉄所の死者数は、戦時中に比べれば少ないともいえるかもしれませんが、製鉄所の歴史を見るとその記録は統計上全く記されていないという事実が重いのと思います。

### 下請け・孫請け労働者の現実

その後、8年4ヶ月勤めた製鉄所をやめ、作家になろうと数年後に東京に出て、文筆業を営んで、3年前に北九州に戻ってまいりました。

先だって、労協の方々と話したときに、私はやっぱり真っ先に申し上げたかったのは、八幡製鉄所の下請け・孫請けの人たちのスクラップヤードでの現実でした。

八幡製鉄所では「安全競争」というのがありました、ときどき事故があって怪我をする。すると事故にあった人が包帯を巻いて肩から吊って工場脇の事務所でぼんやり過ごしている。腕を怪我しているから仕事はできないけれども、それで休むと怪我したことが統計上に表れるから、仕事はしなくても出勤だけはして欲しい。もちろん給料は出るわけですが。そうやって怪我した人を出勤させてまでも「安全競争」の災害率を低くしようという努力はなされておりましたが、下請け・孫請けの危険な職場の人たちについては、一切統計に表しませんでした。

私にとって「不条理」という言葉は、まさに労働災害における下請け・孫請けの人たちのことでした。八幡製鉄所の労働組合が賃上げや労働条件の改善を求めて、ときおりストライキを打っていましたが、ストライキがあると生産管理はストップするわけですから下請け・孫請けの人たちも構内に

入ることができない。仕事が進まないわけです。八幡製鉄所に勤めている人の改善は多少なりともされますが、下請け・孫請けの労働者はなんの保障もない。まさに二重三重の構造です。その後、八幡製鉄所の労働組合は全くストライキをしなくなりましたので下請け・孫請けの労働者にとってはホッと胸をなでおろしたかもしれませんが。

私は1964年、昭和39年、東京オリンピックの年に八幡製鉄所を辞めました。その後のことはよく知りませんが、その後、下請け企業を「協力会社」と呼びだいが下請け企業を大事にする流れがでてきたようです。いま私が申し上げたような状況とは変わってきているようであります。

### 男からの電話

ここから話はガラリと変わるわけですが、今日の講演の演題は「いま求められる協同」ということですが、サブタイトルとして「刑事裁判からみえるもの」としました。ここで「協同」というものを感じることがありますので、その話をさせていただきます。

1986年の5月のことです。私が東京の杉並の家で仕事をしておりましたら、見知らぬ男から電話があつて、私に早口にガツとまくしたてるのです。「私は今年2月中旬に旭川刑務所から刑期満了で出所した者です。私の『身分帳』を読んで小説にしてくれませんか」というのです。『身分帳』というのは「被収容者身分帳簿」といって刑務所に服役したときに、刑務所が保管している門外不出とされる資料なのです。それを出所した男が持っている。変な話だなと思ったので私は「別のことをして忙いので、せっかくお送りいただいても読めないので結構です」とお断りをしました。



私は『復讐するは我にあり』という小説を書いて以来、犯罪小説が専門ということになってしまいました、ときおりこういう話がもちこまれるんですね。「すごい材料がある。これを書けばベストセラーまちがいなしだ。取り分は、私が30%あなたは70%あげましょう」というのです。こういう話に乗っかるともちろんろくなことはないですから、お断りしたのです。あまりつっけんどんに断ると突然家に押しかけたりするかもしれませんので、ご丁重にお引取り願ったわけです。そうしたら「わかりました。それでかまいませんが、一応送りますのでその気が起きたときにでも呼んでください」といって電話を切ったのです。

### 届いた『身分帳』

妙な話だなと思っていたら、数日後に郵便物が届きました。細かいことを申し上げるようですが、郵便の封筒は新聞の折り込み広告の片面だけ印刷されているものを利用したものでした。中に入っているものをみて「ああそういうことか」と思ったのです。彼は東京で事件を起こし、懲役10年の刑が確定して、最初は仙台の刑務所で服役していました。服役中に傷害罪を起こして懲役3ヶ月を追加されていました。不良移監というのですが、「うちの刑務所では手におえないから」ということで旭川刑務所に送られたのです。ところがここでまた同じく囚人に暴行をはたらいて懲役10ヶ月、看守に暴行をはたらいて暴行・傷害・公務執行妨害で1年2ヶ月の刑を追加されていたのです。

刑務所に入ってそこで事件を起こし、検察官に起訴されてまた懲役が追加される。こういう受刑者というのはそんなにはいな

いんですね。だいたいどういう生い立ちかということなんです。彼は福岡市の生まれのようですが、お母さんが出生届を出していないまま行方不明になった。お寺に預けられて、戦後、進駐軍が福岡にもたくさんいて、そこで拾われたらしい。進駐軍が神戸に行くことになって一緒に連れて行かれた。

戦争孤児のようになってかわいそうなので、進駐軍のマスコットボーイのように扱ってかわいがられたようなのです。その後、施設に入ったり紆余曲折をたどるのですが、名前もない、親が誰だか分からないという境遇ですから、施設を出て街に飛び出し浮浪児の群に加わる。そしてまた暴力団の事務所に入ったりはじめたりして、放浪するのが普通のような生活になっていくんですね。

### 『身分帳』の経歴

彼が送ってくれた『身分帳』には、「非行経歴と少年院入所歴」というのがあるんです。「本人は昭和28年から非行少年として少年院に収容され、初等、中等、特別少年院を全国8ヶ所回っている」とありました。

もうひとつは「犯罪経歴と累犯前科」という項目があって、成人してからの犯罪歴が書いてある。「犯人の受刑回数と服役施設の入所回数は、十犯六入を数える」とあります。その他こと細かく『身分帳』に記されていました。

東京でさきほど申し上げた1973年4月に傷害致死で逮捕されて、途中で罪名を「殺人」に変更されて、懲役10年の判決を受け、高等裁判所に控訴して最高裁にも上告し懲役10年が確定したのです。宮城刑務所で1回、旭川刑務所で2回事件を起こした。看守に対する公務執行妨害、暴行・傷害の罪で裁

判にかけられ、旭川地裁で懲役1年6ヶ月の判決を受け、控訴して札幌高裁にいったんですね。そのときの裁判長が、少年時代の非行歴、成人してからの犯罪歴を見た。親が誰なのかもはっきりしない。生年月日は少年院に収容中に15歳になったので、



「就籍決定」というのをしたわけです。これは中国残留孤児の方が、日本に帰って来たときに戸籍をつくる時に用いる手続きと同じようなものです。そういう状況を見て、札幌高裁の裁判長は、彼を精神鑑定にかけの必要があるとして、鑑定を命令したのです。精神鑑定をする医師は、経歴を細かく知る必要がありますから、そのときに『身分帳』を見たい」といったようです。刑務所側としては門外不出なので応じられないとしたのですが、裁判長の命令でやむなく『身分帳』を提出したのです。『身分帳』は被告人の権利で、それを写し取ることができるのです。それを彼は細かく写し取った。それを満期出所のときに持って出て、それを私のところに送りつけてきた。

『身分帳』の内容に話を戻しますが、「指定作業と職業経歴」という項目がありました。「少年院において午前中は義務教育として中学校卒業程度の学科教育を受け、午後からは主に木工、竹細工、印刷、洋裁、農耕など

の指定作業に従事していた。また、各刑務所における指定作業は次のとおりである。奈良特別少年刑務所では主に紙細工でペーパークラフトなどの紙貼り作業、大阪刑務所では洋裁と防具などの縫製作業、京都刑務所では主に独居房に入ったために房内作業で紙細工などの軽作業、云々」。

さきほど、彼が送ってきた封筒は新聞の折り込み広告を利用したものだったといいましたが、彼は紙細工などはお手のものなんですね。そうした資料をいろいろ見ているうちに、彼が戸籍のない男である、15歳のときに戸籍をつくったということも分かった。少年院の近くにお寺さんがあってそこが彼の本籍地になっているということも分かったのです。

刑務所で服役して服役中に3回も起訴され10年の刑期が13年に延びているという男、やる事が非常に反動的、カッとなると何をしだすか分からない。今年5月に、名古屋刑務所で刑務官にとりおさえられた男性

の受刑者が、怪我をしたという事件で、刑務官5人が特別公務員暴行陵虐致傷の疑いで逮捕されたという事件がありました。この受刑者は今年2月に入所して、ささいなことで刑務官から注意されかっとなって犯行する、それを刑務官の側も抑圧する、するとますます暴れる、そこで革手錠をかけるということがやられています。まず胸に革を巻いて固定して結びつける。

### 男に会ってみる

この男もこういうことを経験していたわけです。いずれにしても、惨憺たる彼の人生でした。そういうことを知るうちに会ってみる気になりました。最初に電話がかかってきたのは86年の5月ですけれども、8月に私のほうから連絡して、会うことになりました。

彼は旭川刑務所で服役中に本態性高血圧というのにかかって、出所して身元引き受け請け人の弁護士の世話で、医療保護および生活保護を受けていたのです。目黒区内のアパートで暮らしていました。彼と一緒に食堂で食事をして、「なんで僕のところに電話をかけてみる気になったのか」と聞くと、「あなただったら私のことを書いてくれるかもしれないと思った」というんですね。本を読むのが好きな男で、私が犯罪者をモデルにして現実の事件、裁判をもとにして小説を書いていることを知っていたのです。

長年やくざをやっていた男でありますから、礼儀正しいことは礼儀正しい。たとえば食堂に入っておしぼりが運ばれてくる。するとさっと取って広げて私の手元に差し出すんですね。「あなた、なんでそんなことするの？」という。「いえ、私はこういうふうにしつけられていますから、親分にこうし

ないと叱られるんです」。あるいは冬になって、彼の部屋に行ったり食事に行ったりしてコートを着ようとする、「さあどうぞ」とはおらせてくれる。そういう男です。

### 男の周りの人々

彼がアパートに暮らすようになって、近所にとてもやさしい酒屋さんがいて、彼がどういう経歴の男かをいちやく察知して声をかけてくれたんですね。「じつは俺も昔ぐれていたことがある。今はなんとか店を持って切り盛りしている。生活保護で生活するのは苦しいだろう」といって、賞味期限切れ寸前の食料品などをあげていたんですね。

そういうやさしい人に恵まれていた。また、身元引受人の弁護士、この人は当時80歳を越えていた人です。たとえば、岡本公三という赤軍派の男がテルアピブで乱射事件を起こしたという事件がありましたが、これを聞きつけるとテルアピブまで会いに行った。そういう弁護士さんです。

さきほどの『身分帳』の男。彼は刑務所の中で起訴されたということを申しましたが、起訴されるというのはゆくゆくのことなんですね。起訴される前に、懲罰を何十回と受けているわけです。どういう懲罰かというと、懲罰房に入れられ、革手錠をかけられ24時間放置される。監視カメラがついていて食事になると懲罰房の入口にボンと置かれる。手足を固定されているので、芋虫のように這ってそこまでいき、口を突っ込んで食べる。犬食いです。トイレはどうするかというと、これは垂れ流しだそうです。こうした経験をいっぱいしている。

当時、拘置所には赤軍派や連合赤軍の人たちもたくさん収容されていた時代でした。



裁判のときに拘置所から裁判所に護送されるわけですが、そのときに話すチャンスがある。森恒夫という自殺をした連合赤軍の男がいますが、この男にその『身分帳』の男が声をかけられた。「連合赤軍に入れ」といわれて、「いや自分は思想的には右翼であるから、あんたたちといっしょにやっていけない」と。「弁護士はどうした」というから「いや特にあてがない」。そうしたら、弁護士を紹介するといつてさきほどのテルアビブまで行った弁護士さんを紹介してくれたそうです。その弁護士さんは、この男の経歴にたいへん同情してガミガミ叱ったりしないで、「衣類はどうしているんだ?」「食べ物は何?」といつてとてもやさしくしてくれた。

また、同じアパートに聾啞者の青年がいました。この青年とも仲良くしていた。おそらく看守のような人に高圧的に命令されると、本能的にすぐカッとなる男なんですよ



う。だから、数々の規則違反を起こして革手錠をかけられて懲罰房に入れられた。

彼が東京でキャバレーの店長をしていたときに、ホステスの引き抜きというのがあった。彼の店が引き抜きをしていて、引き抜かれた相手側の暴力団がやってきていきなり切りつけてきた。その刀を奪い取って10数箇所切り付けて出血多量で死亡させた。傷害致死で逮捕されたわけです。法廷であまりにも反逆的だったので検察官が訴因変更して殺人罪を適用し、懲役10年ということになっていくのです。

### 彼の話を書いた小説

そういう男と付き合っているうちに私の心境も変わってきました。彼が生まれたとされる福岡市、少年時代をすごした神戸、京都、そこに彼と一緒に行って当時の思い出を語ってもらうことによって、長編小説を書こうという気持ちになっていきました。そこでひとつ彼と約束をひとつして欲しいと。「私はあなたの希望通りのものは多分かけないだろうけども、自分なりにあなたのような男が戦後を生きてきたんだということを物語としてやっぱり書きたい。ただ、ひんぱんに会うことになるけれども、あなたが何か新しい事件を起こすようなことがあれば、その時点で取材を止めるし、もちろん小説なんて書かない。」と言ったら、彼はしばらく考えて「わかりました、約束は守ります。」と言ったので私も安心して親しくなっていくんですね。

私が旅行に行っているときに、私の杉並の家に電話がかかってきて女房が電話に出たら「先生のお宅には小さいお子さんがいますよねえ」という。「いますよ」と答えたら「おいしいものが手に入りましたのでお



届けします」というのです。女房はそんなもの届けてほしくないと思っているし、勝手に電話をしてきて勝手に来るといっている。そしてまもなくやってきて箱を置いていった。なんだろうと思って女房がフタをあけると、法事でよく出される砂糖菓子だったんですね。なにかの用事で法事があった、そこでもらったものを私の家にふと持ってきた。女房は烈火のごとく憤ってすぐゴミに捨てた。それを聞いた私は烈火のごとく怒って大喧嘩になったのですが、少なからずそんなことが、その男と付き合っていく過程でありました。

付き合いだして1年足らずのときに、彼の誕生日にデパートで肉とワインを買って、彼のアパートでフライパンを借りて、私がステーキを焼いて、赤ワインで乾杯したんです。「いま、おだやかに暮らせてよかったですね」というと首をうなだれて「こんなことをしてもらったのは初めてですよ」というのです。

そしてふと厳しい表情になって「私も本を読むのが好きで雑誌なんかもち立ち読みしますが、先生は新宿のゴールデン街あたりで喧嘩をして殴ったり殴られたりしてけがしたことがあるそうですね。今後、もし新宿でもどこでもやられることがありましたら、すぐ私に電話をください。すぐに飛んでいきます」なんてことをいう。

私の方は、取材の対象者でもありますから、気持ちを和ませてゆっくりと話でもしようと思っただけなのですが、彼は自分に何が出来るか考えたようなんですね。「飛んでいきます」というのですが、彼のような人が飛んできたなら相手は死んでしまうかもしれない。私は責任教唆になるわけでありまして。

彼は、要領のいい人間でもありますから、近所の人にも親切にしてもらおうと彼も親切にしないわけにはいかないという気持ちになるようです。たとえば、おばあさんが草むしりをしていた時のこと。「おはよう」と声をかけるとおばあさんが「おはよう」とにこやかに返してくれた。それが彼はうれしいらしく、草むしりをいっしょにする。

### 「小説ができないから殺す」

彼が「作品ができるまでは事件を起こさない」と言っているので、私はなるべく作品ができるのを先送りしていました。3年くらいたったころ、夜中に電話がかかってまいりまして「私はどうしてもがまんのならないことがあります。ついては明日の夜明け前にこの男を刺し殺しに行きます」というのです。「あんたなんていうの?」というので「いや、いくら待っても小説ができあがらない」というのです。「いやいや、半年以内に必ず書くから。絶対書くから」とあわてて言うので「わかりました。じゃあがまんします」。

編集者から催促されることはたびたびですが、「原稿がいくら待ってもできないから人を殺しに行く」なんて台詞をはかれたのは当然初めてであります。その後身を入れて書いて、講談社から出ている「群像」という文芸雑誌に1990年4月号に掲載されたんですね。長編で400字詰め原稿用紙520枚の作品です。その後1990年の6月に単行本がでました。

この男は背中に桜吹雪の筋彫りというのが



あるんですね。いつこんなものをつけたのかといいますと、彫り師の弟子がいて、少年院のときに縫製作業でつかう針で彫ってもらったようです。それで、単行本にするときに、司修(つかさおさむ)さんという装丁家が出てどんな装丁がいいか相談をしていたら、「ああそうだ、彼は背中に桜吹雪があるそうですから、きれいな桜吹雪の絵にしましょう」ということになりました。単行本ができて、私は福岡市にそれを届けました。

彼は、私の作品が最後の段階に差し掛かったころ福岡市に移っておりました。なぜかという、彼の生まれ育ったところは福岡市。市内に萬行寺というお寺がありました。私もそこに取材をしにいったことがあります。かれはもう、長い人生ではないから福岡市に戻って萬行寺でゆったりさせてもらおうと。もしかしたら自分の母親の消息がわかるかもしれない。生きていないとしてもお墓ぐらひはみつかるのではないかと。ということで福祉事務所をお願いをして福岡市にうつしてもらったんですね。私がアパートの保証人になってアパート暮らしをしていた。そこへ、桜吹雪模様の単行本を持って訪ねたわけです。彼は非常に喜んでくれました。私は福岡に一晚泊まって東京に戻ったのですが、彼は何回も何回も読み返したそうです。とにかく何回も何回も読みましたという電話をかけてきてくれました。

## 男の最期

1990年11月1日、東京の自宅で仕事をしておりましたら、福岡県警の南警察署から電話がありました。「あなたは佐木隆三さんですか」「はい」「Mという男をしていますか」「はい知っています」「あなたがアパート

の保証人ですね」「はい」「彼は亡くなりました」「どうしたんですか」「司法解剖をいましていますのでとりあえずお知らせします」

こんなやりとりがありました。その日の最終便で南警察にいったら、包帯でぐるぐる巻きにされた彼の遺体がありました。その前に事情聴取を受けたのですが、「あなたはこの3日間くらい福岡にきたことがありませんか」「ありませんずっと東京にいました」「何月何日にどうしていたか言ってもらえますか」

私が警察から電話をもらったのは11月1日の午後なのですが、10月29日に彼は倒れていたようなんですね。それで29日以後のことを調べた。

1日の昼頃、裏窓が開いたままなので朝晩冷え込む時期なのにおかしいかと、アパートの大家さんが不思議に思って鍵をあけた。そうすると彼の足がぬっと窓のほうにでていて、仰向けに倒れていたそうです。司法解剖の結果、脳内出血だったようです。

警察というのは、変死を遂げた場合はあらゆる事態を想定しますから、いろいろと調べる。たとえば私はアパートの保証人ですから、争いごとをおこして殺されたのではないかとことまで調べるわけです。捜査というのはそれが常識ですから、私も事情聴取に応じました。

遺体はどうするのか聞いたら、「市役所の許可ももらっていますから、明日にでも火葬をして無縁仏として市が面倒をみてくれるでしょう」とのことでした。そこで私は「ちょっと待ってください。これこれの事情でこの男とつきかかってきたから、私が喪主になって葬式をあげたい」と申し出ました。

斎場を紹介してもらって、深夜に立派な

斎場に案内され、棺と一緒にいきました。棺の横に布団がしかれ、「今日は遅いから泊まっていきますでしょ。どうぞこちらに」というので、さすがにそれは勘弁してほしいとホテルに泊まったのですが、早朝、講談社の人もかけつけてくれて、お通夜とお葬式をやって、大宰府にあるお寺さんに遺骨を納めました。

その後、警察署にごあいさつにいきました。そこで「彼の出所後になにか事件を起こした記録がありますか」と聞いたら「調べてみます。後日こちらにお越しの際にお立ち寄りくださいそれまでに調べておきます」と所長さんが約束してくれました。

45日の法事を大宰府のお寺でやって、警察署に立ち寄りしました。そうすると署長さんが用意してくれたメモに、旭川刑務所から出たときに、窃盗事件を起こしていたんです。放置自転車を持ち帰ろうとしたときに警察官に咎められて、事情を聞かれ、事件にすることは無いということで嚴重注意で返してもらったようです。それから警察の人に「そういえばアパートの大家さんにあいさつに行っていないでしょ」といわれ、しまったと思い、行ったわけです。70代半ばの方ですが「あんた、なんであの人と知り合いですか？」というので、これこれこうですと言ったら納得してもらえた。大家さんの言うには、その男は「法務省の仕事でこちらに来ている」と言っていたそうで、「どういうお仕事？」と聞いても「いやちょっと秘密の仕事ですから」とかなんとか言っていたというんですね。

大家さんはすっかりそうだと思っていたらしいんですね。そのとき「とびうめ国体」が開催されたのですが、大家さんのところに警察の人がやってきて、「Mさんはどんな

日常ですか？」と聞いたようなんですね。国体の時には天皇・皇后がみえるので、警察ではその地域で前科のある人の動向については、すべて調べるようです。大家さんは法務省の人なのに警察がくるなんておかしいなとは思ったそうなのですが、「私は畑仕事をしよるんですけどね、あの人よく手伝ってくれるんですよ。あの人にとれたものをあげたりして。よくやってくれるんです。あの人のお母さんが生きていたらちょうど私ぐらいの歳だって」なんてことを話したそうです。

### 隣人たちのやさしさ = 協同

長々とこんな話をしてきましたが、刑務所に入れられ、めったやたらに反逆をして生きてきた男。この男が出所してやさしい弁護士さんに身元引受人になってもらって、酒屋さんに親切にしてもらって近所のおばちゃんと仲良くなった。これだけ惨憺たる生涯を過ごしてきた男が、出所して5年事件は起こしていない。

いずれにしても今日聞いていただいたかったのは、そういう隣人たちのやさしさ。彼にはもっと長生きしてもらいたかったと今になっては思うんですが、私にとっての協同というのはこういうことだ、と思ってお話しました。ありがとうございました。

